



夕陽會報

五代目として開業した新函館駅舎

第180号 総会特集号



◇ 巻頭言 ◇

北海道教育大学の 再編と函館校(Ⅱ)

会長 安島 進

五月中旬、将来計画特別委員会から「北海道教育大学将来構想基本方針(案)」が示され、これに対する各分校教授会の意見を求められた。

この基本方針案は平成十三年三月に示された将来構想「第一次案」、十四年九月に将来計画特別委員会です承された「キャンパス再編の基本方向(案)」、さらに昨年九月以来協議を重ねてきた六つの構想部会からの報告を基に、将来計画特別委員会が第一次案を手直して提案したものである。内容は十項目にわたっているが、その内の「Ⅱ再編の基本」では、五分校の将来像ともいえる具体的なキャンパス配置や機能分担の基本について述べている。即ち

(1) 教員養成課程は、大学としての統一的な理念と目標に立脚した緊密な連絡により、札幌、旭川、釧路キャンパスに置く。札幌及び旭川キャンパスには、距離的条件を生かした相互の協力により充実した教育課程を置き、釧路キャンパスには、小学校教員養成を中心に特色ある教育課程を置く。入学定員は、養護教諭養成課程を含めて七〇〇名とする。

(2) 芸術系及びスポーツ系を除く新課程は、教員養成の集約と関連させながら、集約・再編のためにより適切なキャンパスを選択することとし、これまでの実績と、入学希望者を広く惹きつける大学としての歴史的・文化的な立地環境を有しているかどうかに留意して、函館キャンパスに置く。さらに教養系の新しい理念・目標と教育課程に合致する

形で、開放制の教員養成機能を適切に組み込む。入学定員は三三〇名とする。

(3) 芸術系及びスポーツ系(略) 岩見沢キャンパスに置く。入学定員一八〇名

(4) 大学院(略) 札幌、函館、旭川、釧路に置く。

※(この再編の基本をもとにして、他の項においてそれぞれ理念や目的、教育組織等が述べられている。)

これらについての函館校教授会の見解は「基本方針案を採用することには賛成できない。」とするものであった。その理由は、大きくは次の二点である。

・教員養成を受け持つ札幌と旭川にどのような教育課程を置くのか、そのことが北海道教育大学全体として教員養成のパワーアップにどう関わるのかの具体的な提案や説明がないこと。

・教養系の集約は単なる新課程の集約ではなく、北海道教育大学の発展構想として、教養系学部または学類として明確な位置付けをすべきであること。

特に教員養成に関わる函館校の歴史と実績からしても、教員養成課程の継続・存置を強く願ってきた中で、教員養成のパワーアップの方策が不透明なままで賛意を表するわけにいかないのは当然である。また教養系学部(学類)としての位置付けについても、大学法人化への移行を好機と捉え、魅力ある学部づくりを全学協力のともに達成すべきものであろう。

母校は正に苦悩を克服して将来像への再編を試みている段階である。夕陽会としても母校と願いを共有し、新生函館校実現のための支援をして参りたい。

顧問・参与会

五月二十七日(火)五島軒駅前支店において、瀬川直光顧問(昭和十九年卒)、田島隆参与(昭和二十八年卒)等の参加を得て顧問・参与会が開催された。

尾島悌介副会長の司会進行により開始冒頭、安島会長が挨拶をされ、財政事情や、各専門部の努力等について話された。ついで、総会議案審議に入り、推進事項に新たに「若手会員」の参画強化と「母校や函館の情報提供」を盛り込むことや母校への支援策、会計報告等が話され総会議案の審議を終えた。

次に、会長より大学改革の現状について、函館校教授会の考え方など縷々説明され、小委員会の設置や要望を出す等の方策が述べられ、瀬川顧問や山尾参与から母校の将来を思う同窓の気持ち熱く語られた。最後に、職能に係わる役員改選などについて話され、会場を包む熱気の中でこの会を終えた。

大懇親会

於 ホテル函館ロイヤル



顧問・参与会



全国支部長会議

全国支部長会議

夕陽会総会に先立って全国支部長会議が二十五名の代表の参加を得て開催された。総会議案等が審議され、組織強化や財政事情の説明を受け、支部毎の取り組みの実情交流が行なわれた。

尾島、中瀬副会長の司会進行で議事が進められた。会務報告に続き会計報告となり、会費納入会員の減少が取り上げられ、組織強化のための工夫が必要であり、推進事項にある女性会員や若手会員の活躍の場を設定し会員意識の高揚に努めるよう話し合われた。

次に、各支部の活動交流となり、札幌市支部からは、「歴史をさぐる」という委員会を立ち上げ、支部の歴史を残す活動が報告された。後志支部からは、年齢別部会を作り活動を充実させる工夫をしているなど情報交流が行われた。一般会員の組織化等、各支部それぞれの課題を胸にこの会を終えた。

「創造し行動する夕陽会」を再確認

平成十五年度

夕陽会総会

六月十四日(土)全国支部長会議の充実した審議を受け午後四時の定刻を若干過ぎたが、平成十五年度「夕陽会」総会がホテル函館ロイヤルで開催された。

総会は類家附属小学校副校長の司会で始まり、会長からは「創造し行動する夕陽会」という昨年度制定した行動指針に基づいて各支部とも工夫がなされた一年であった。大いに評価したい。今年もさらに前進を期待したい。」との挨拶があった。

続いて、渡島支部から天野哲征支部長、網走連合支部から横田達哉支部長、東京支部から奈良吉彦支部長を議長に選出し議事の審議に入った。

報告事項では、藤川 隆幹理事長代行から「平成十四年度会務報告」が(1)本部署務局各部の活動(2)主な会務(3)各支部等の状況(4)会員の動向について報告された。

網野重治財政部長からは会計報告がなされ、その中で会費納入会員の減少が昨年に続き報告された。その後、今野監査より会計監査報告が行われた。

続いて会長から



総会・会長あいさつ



新役員のあいさつ

ら、心配されている母校の動きについて「平成十六年度より独立行政法人化がなされること。函館校については教員養成ができる体制を残す方向で教授会と足並みをそろえて各方面に働きかけを行っていること。」が話された。

また、組織強化について今後、教職員以外の会員の加入に向けた活動の強化と支援体制について藤川幹理事長代行から要請があり、報告事項については一括承認された。

次に協議事項に入り、(1)「平成十五年度運営方針並びに推進事項」(2)学部改革に対する要望について(3)平成十五年度予算案(4)本部役員改選(補充)が審議され、全会一致で承認された。

特に、学部改革に対する部分については、夕陽会としてのスタンスを①母校の応援団として対応②地域との連携の強化とし、報告にもあったように教員養成課

平成15年度 夕陽会総会

平成15年6月14日

程を残すことを最優先にし、最低でも養成機能の存続を学長・主事に強く訴えていくことが確認された。

松本前幹事長の知内町教育長就任や四月の異動に伴う本部役員補充では、小山内役員選考委員長より選考委員会原案が提示され、次の方々が新役員に選出された。

副会長 長谷川 良任

副会長 高橋 康夫

幹事長 藤川 隆

副幹事長 類 家直

副幹事長 土谷 敬

(昭和47年卒 千代田小学校教頭 上平 敏和記)

絆と連帯を深めた 大懇親会

総会終了後のホテル函館ロイヤル・キングホール前のロビーでは、総会の緊張から解き放たれた空気が漂い、母校とともにする夕陽会員が旧友や知人と談笑し合い、懇親会の始まる前から会場全体が大きな熱気に包まれていました。

懇親会場の準備が整い、それぞれが着席。十七時三十五分、会場を一杯にした六百を越える会員の拍手に迎えられて、田中洋本部副会長の先導で来賓の方々が入場。司会進行を努める島津彰本部副幹事長の歯切れの良い進行で、坂口一弘本部副会長の「人民蕃殖の仲間が集い、連帯を育む大懇親会に。」との言葉で平成十五年度夕陽会大懇親会が開幕しました。

平成十年夕陽会創立八十周年記念制定歌「夕陽讃歌」を三浦浩平先生の指揮のもと、絆で結ばれた仲間が心を一つに美しい歌声を響かせました。夕陽とこしえにとの思いを強く感じた一瞬でした。挨拶に立たれた安島会長より参加者全員に、本会が盛会裡に開催できたことに對しての感謝が述べられ、来賓の方々の紹介の後、大学改革に触れ、「夕陽会は、母校と共にある。母校の改革が新時代における教育・文化の発展に貢献できる人材養成を目指し、努力されることを期待し、夕陽会はこれを支援してまいりたい。」と力強く述べられました。

来賓の挨拶では、井上函館市長より「厳しい状況ではあるが、地域の活性化・人材の育成に努め、中央図書館の建設や市内の大学を結ぶ大学センターの設置等教育環境の整備を行い『街づくりは人づくり』で頑張りたい。又、八十余年に亘る教育大学の業績は多大であり、大学の改革の問題でも教員養成課程の存続を訴えていく」と述べられました。

平塚努北海道教育庁渡島教育局長は、夕陽会の会員の教育改革に対する様々な取り組みを讃え、行動指針「創造し行動する夕陽会」の精神を寮歌の一節「それ育英の大偉業」を引用して夕陽会へエールを贈られました。

大坂治函館校主事からは、大学の法人化の現在の状況と新课程に移行した場合の函館校の教員養成機能を残す取り組みや今以上に地域との連携を深めた人材の育成、地域に愛される大学を目指したい。夕陽会には、函館校の取り組みを支援していただきたいと述べられました。

土谷 敬本部副幹事長の祝電・祝詞披露の後、恒例の音楽科卒業生を中心とした混声合唱団の校歌、学生歌が会場に響き渡り雰囲気も一気に盛り上がってきました。

前渡島支庁長松田光暁氏の「元気で酒が飲めるように体に気を付け、自信を持って子どもを育てましょう。」との発声で祝宴が開始されました。

会場内は、若き日がつい昨日のことのように感じられる夕陽会大懇親会独特の雰囲気にも包まれ、青春時代をともに過ごした仲間が語り合う姿があらうこちらに見受けられ、予定の時間も瞬く間に過ぎていったように感じられました。その熱気の中、フレッシュな新入会員十二名が登場し、それぞれの職業に對しての決意と入会の意思表示が若者らしい元気な態度で行われました。また、岩村吉男八雲町教育長からの先達としての励まし

の言葉は、新たに夕陽の同志となった十二名の胸にしつかりと刻まれたものと



夕陽讃歌大合唱

思います。宴も佳境に入り、恒例のエールを佐々木壮一先生(的場中)の打ち鳴らす太鼓に合わせ勇壮な柔道着姿で登場した木代堅巳先生(的場中)と山岸一徳先生(千代ヶ岱小)。嘗てのパンカウ調で檄をとばし、三三七拍子と会場全体も熱気溢れるものとなってきました。時間も残り少なくなり、トリを飾る寮歌の大合唱。諸先輩方が背に「夕陽」の揃いの法被姿で登場、高橋正雄参与の音頭で会場が揺れるような歌声が響き渡りました。

余韻が醒めないまま最後の乾杯に移り、法被姿で登場した金山正智教育長の「法被を着て、ハッピー」のジョークも飛びだし、夕陽会の益々の発展を願った、参加者の気持ちを合わせての一本締めでお開きとなりました。最後に、高橋康夫本部副会長の「今日の大懇親会の元気を貰って、教育改革を頑張っていこう。」の言葉で大懇親会も盛会の裡に終了しました。

(昭和50年卒 高丘小学校教頭 三原 満記)

平成十五年度 夕陽會運営方針並びに推進事項

《運営方針》

「創造し行動する夕陽會」をモットーに、会員一人一人に活力と潤いをもたらす会運営の充実と活動の活性化を図り、次の各事項の深化拡充に努める。

《推進事項》

- 1 組織強化と運営の効率化
会員相互の連携を重視し、各界会員の組織化と会運営の効率化を図る。
(1) 各界の会員動態の把握と広報活動の充実。
(2) 一般職会員及び高等学校支部、特殊諸学校支部の強化。
- 2 人材の開發
人材の発掘と会員の地位の向上を図る。
(1) 会員である道・市町村議會議員、首長等との連携。
(7) 夕陽ホームページの充実。
- 3 女性会員及び若手会員の運営への積極的な参画。
(4) 本部と各支部、各ブロックとの連携強化。
(5) 夕陽会報180、181、182号発行。
(6) 母校及び函館に関する情報の積極的な提供。
- 4 財政の確立と業務の効率化
財政の確立と業務の効率化を図るため、財政の確立と財務の効率的な推進に努める。
(1) 財政基盤の確立と諸会費納入の促進。
(2) 財政業務の効率的処理。
- 5 母校の發展を願ひ、当面する課題解決のための支援を行う。
(1) 会員予定者に対する意識の啓発。
(2) 就職対策関係事業への支援。
(3) 学部改革への支援と母校の充実発展に寄与。
- 6 夕陽記念館（北方教育資料館）の整備・充実
各種記念資料等の収集と適切な保存、陳列の充実に努める。
(1) 記念資料等の収集。
(2) 館内外の環境整備、陳列品の整備。
(3) 会員の作品収集と目録補遺X v（夕陽会報）発行。

会務報告



幹事長代行
藤川 隆
(昭和48年卒)

《一般会務》

- 3・6 大学改革に関して大学教授と安島会長、藤川幹事長代行が意見交換する。(函館)
- 7 大学改革に関して分校主事と安島会長、藤川幹事長代行が意見交換する。(函館)
- 10 夕陽会報179号発行する。(函館)
- 11 第四回本部役員会を開催する。(函館)
- 14 北海道教育大学五分校同窓会長と学長等との懇談会に安島会長出席する。(札幌)
- 4・10 大学改革に関して函館校教授と安島会長、藤川幹事長代行が意見交換する。(函館)
- 17 大学改革に関して大坂分校主事と藤川幹事長代行が意見交換する。(函館)
- 22 第五回本部役員会を開催する。(函館)
- 29 春の叙勲・高齢者叙勲受賞者に敬意を表す。
- 5・8 大学改革に関して函館校教授と安島会長が意見交換する。(函館)
- 12 第六回本部役員会開催する。(函館)
- 22 平成14年度会計監査を行う。(函館)
- 23 大学改革に関して函館校分校主事と安島会長・藤川幹事長代行が意見交換する。(函館)
- 4・19 《支部総会・祝賀会・個展等》
函館市支部総会に安島会長・藤川幹事長代行が出席する。(函館)
- 20 千葉軒岳氏(昭和34年卒)北海道文化奨励賞受賞祝賀会に安島会長が出席する。(函館)
- 23 札幌支部総会に安島会長・藤川幹事長代行が出席する。(札幌)
- 25 渡島支部八雲支会総会に尾島副会長が出席する。(八雲)
- 5・9 室蘭市支部総会に尾島副会長が出席する。(東室蘭)
- 9 石狩支部総会に安島会長が出席する。(札幌)
- 10 渡島支部総会に藤川幹事長代行が出席する。(函館)
- 11 小樽市支部総会に中瀬副会長が出席する。(小樽)
- 16 苫小牧支部総会に安島会長が出席する。(苫小牧)
- 17 後志支部総会に安島会長が出席する。(倶知安)
- 17 檜山支部新会員歓迎会に藤川幹事長代行が出席する。(江差)

28 函館支部新会員歓迎会に安島會長、藤川幹事長代行が出席する。
(函館)

30 渡島支部上磯支会総会に島津副幹事長が出席する。
(上磯)

6・5 渡島支部知内支会総会に安島會長が出席する。
(知内)

7 楽友会昭和31年卒同期会に祝意を表す。
(函館)

15 夕陽書道展祝賀会に安島會長、藤川幹事長、島津副幹事長が出席する。
(函館)

17 渡島支部大野支会総会に土谷副幹事長が出席する。
(大野)

23 渡島支部砂原支会総会に類家副幹事長が出席する。
(砂原)



受賞(章)おめでとうございます

春の叙勲

〈勲五等双光旭日章〉

浜田 努 氏 昭和19年卒

音更町木野大通東八の五の三四

〈勲五等瑞宝章〉

島田 正 氏 昭和19年卒

札幌市西区西野七の二の六の五

飯野 正夫 氏 昭和20年卒

滝川市滝の川町東一の六の一七

夕陽會本部 事務局業務分担

庶務部

1 諸会議(含懇親会)の諸準備及び進行、記録。

2 文書の收受、発送及び保管。

3 会員の慶弔事務。

4 その他、庶務に関する事。

財政部

1 通常会費の徴収、支出事務。

2 基本金及び特別会計の徴収、支出事務。

3 予算書、決算書の作成。

4 その他、財政に関する事。

組織部

1 支部組織の編成と組織強化対策。

2 会員の動態調査の実施(支部別、校種別会員名簿)。

詩集「竜宮街道」

井上 保氏 著 (昭和20年二師卒)

昭和二十年二師第三回卒、札幌在住の同窓、一方井孝親氏よりお手紙をいただきました。佐賀県唐津市に住む井上氏の望郷の念、夕陽会への情熱を同窓の先輩後輩にも紹介したい、との申し出でした。

※一方井氏へ宛てた井上氏の手紙より抜粋
・この三月実施の道立高入試国語問題に出題の「春楡の樹」(詩集竜宮街道より)、北海道の中学生が高校受験で私の詩と取り組み、高校の新生一年生になるわけで、一編の詩のもつ不思議なつながりを思います。

・函師大正十四年卒の木村不二男先生は、童謡作家として「赤い鳥」に寄稿し、作品「アイヌの子」は、「日本童謡集」岩波文庫にはいつています。そして、函師昭和四年卒の石塚紀久三先生は、昭和十八年上半期第十七回芥川賞「纏足の頃」に輝いています。大先輩の偉業を思うにつけ、私も再度、幼年詩、少年詩などを書こうかと思つたところです。

・昨年短歌で賞を取りました。全国教職文芸協会の短歌部門、平成十三年度年間賞、選者歌人、田谷 鋭 先生、人生の終章を文芸創作にかけました。

一方井氏のお手紙には、次の短歌が紹介されていました。
「同期生ら僅かの酒に酔いしれて
「同期生ら僅かの酒に酔いしれて歌う」
察歌の一番力みて歌う」

平成十二年九月発行「玄海の四季」より
ちなみに、「竜宮街道とは、サロマ湖とオホーツク海を分かつ大砂洲の別名で、明治の文章家大町桂月の命名という」とありました。

文化情報

情宣部

1 「夕陽会報」の発行。

2 事務局報の発行。

3 その他、情宣に関する事。

文化部

1 会員の文化活動に対する支援。

2 文化事業(音楽会・美術展・書道展等)の企画、実施。

3 その他、文化に関する事。

研修部

1 会員の地位向上対策。

2 会員の個人及び共同研究への助成。

3 支部、ブロックにおける研修活動に対する支援。

4 その他、研修に関する事。

厚生部

1 会員の親睦及び福利、厚生事業の企画、実施。

2 記念資料及び会員の作品収集。

3 夕陽記念館の整備、充実。

4 その他、厚生に関する事。

厚生部

1 会員の親睦及び福利、厚生事業の企画、実施。

2 記念資料及び会員の作品収集。

3 夕陽記念館の整備、充実。

4 その他、厚生に関する事。

平成十五年度支部役員名簿

(札幌市)

長 青柳史匡 柏中長
副 早藤弘泰 南小長
副 山本和博 札幌市
副 横山眞昭 札幌市
幹 佐々木良則 札幌市
会 佐々木良則 篠路西小長

(石狩)

長 岩間弘光 江別第二中長
副 市川軍治 江別第三中長
副 時田幸忠 石狩市
副 西家健悦 江別市
幹 西家健悦 豊幌小長
副 田和雄 北広島市
会 竹内昌直 石狩市
幹 櫻内昌直 生振小長

(後志)

長 木村武正 岩内第二中長
副 平野秀克 岩内中央小長
副 小寺憲雄 蘭越小長
副 川平正博 俱知安町
幹 川西三男 俱知安町
会 新井融 蘭越小長

(小樽市)

長 後藤幸夫 緑小長
副 小高邦夫 量徳小長
副 田高克人 祝津小長
副 清橋義人 小樽市
幹 小林稔史 小樽市
会 小樽市 小樽市

(上川)

長 幸坂正徳 美瑛中長
副 高橋信一郎 旭川市
副 井上博美 旭川市
幹 石川美博 旭川市
会 旭川市 旭川市

(宗谷)

長 齊藤勝也 稚内市
副 谷藤芳弘 稚内市
副 池田忠喜 豊富町
副 大野敏隆 豊富町
副 野坂修司 豊富町
副 山野潤元 豊富町
幹 山野潤元 豊富町
会 山野潤元 豊富町

(留萌)

長 秋葉良之 羽幌小論
副 熊倉一弘 羽幌小論
副 澤田仁志 増毛小論
会 澤田仁志 湖静小論

(檜山)

長 若狭邦隆 江差小長
副 若狭邦隆 江差小長
副 大田雅博 厚沢部小長
副 吉田正徳 厚沢部小長
幹 花田雅博 厚沢部小長
会 花田雅博 厚沢部小長

(札幌市)

会 渡島 敬 江差町
長 天野哲征 上磯町
副 守田君子 砂原町
副 川合正芳 七飯町
副 藤枝秀雄 長万部町
幹 小原鉄雄 大野町
会 小原鉄雄 鶴野小長

(函館市)

長 小内武弘 函館市
副 伊藤皓嗣 函館市
副 青木完二 函館市
副 野中潤子 函館市
幹 青木完二 函館市
会 青木完二 函館市

(空知連合)

長 松田清 浦白町
副 吉田喜一 沼田町
副 石井秀樹 三笠中長
幹 石井秀樹 三笠中長
会 石井秀樹 三笠中長

(胆振連合)

長 渡辺輝夫 伊達市
副 山田幸雄 登別市
副 堀田隆 登別市
副 宇野敏昭 登別市
幹 宇野敏昭 登別市
会 宇野敏昭 登別市

(苫小牧市)

長 坪弘之 苫小牧市
副 村川龍介 苫小牧市
副 藤沢紀世安 苫小牧市
副 川端明一 苫小牧市
副 萩野雄登 苫小牧市
副 萩野雄登 苫小牧市
幹 萩野雄登 苫小牧市
会 萩野雄登 苫小牧市

(室蘭市)

長 西村昌三 八丁平小長
副 今泉哲弘 武揚小長
副 佐々木由紀子 常盤小長
副 八木由紀子 常盤小長
副 佐々木由紀子 常盤小長
幹 佐々木由紀子 常盤小長
会 佐々木由紀子 常盤小長

(日高)

長 阿部誠 門別町
副 中澤勝一 門別町
副 笹川幸一 門別町
副 佐藤光一 門別町
幹 佐藤光一 門別町
会 佐藤光一 門別町

(十勝)

会 小笠原進 平取町
長 菅忠良 更別村
副 岡本正一 豊頃町
副 岡本正一 豊頃町
幹 岡本正一 豊頃町
会 岡本正一 豊頃町

(帯広市)

長 唐澤三 帯広市
副 丸山正人 帯広市
副 丸山正人 帯広市
幹 丸山正人 帯広市
会 丸山正人 帯広市

(釧路)

長 山本之 釧路市
副 若狭博光 浜中町
副 若狭博光 浜中町
幹 若狭博光 浜中町
会 若狭博光 浜中町

(根室)

長 荒井道夫 中標津町
副 小林哲世 別海町
副 小林哲世 別海町
幹 小林哲世 別海町
会 小林哲世 別海町

(網走連合)

長 横田哉 北見市
副 恒吉裕平 北見市
副 恒吉裕平 北見市
幹 恒吉裕平 北見市
会 恒吉裕平 北見市

(高等学校)

長 野田成勤 函館市
副 宮下勤 函館市
副 宮下勤 函館市
幹 宮下勤 函館市
会 宮下勤 函館市

(特殊教育諸学校)

長 別府亮次 小樽市
副 岩尾正夫 南幌町
副 岩尾正夫 南幌町
幹 岩尾正夫 南幌町
会 岩尾正夫 南幌町

(青森西北五)

会 湯藤幸樹 青森市
幹 湯藤幸樹 青森市
副 湯藤幸樹 青森市
副 湯藤幸樹 青森市
副 湯藤幸樹 青森市

(青森南部)

長 永井俊明 八戸市
副 金谷誠一 八戸市
副 金谷誠一 八戸市
幹 金谷誠一 八戸市
会 金谷誠一 八戸市

(秋田)

長 菊池信和 能代市
副 野呂田黎子 能代市
副 野呂田黎子 能代市
幹 野呂田黎子 能代市
会 野呂田黎子 能代市

(岩手)

長 川崎徳吉 盛岡市
副 山崎紀宏 盛岡市
副 山崎紀宏 盛岡市
幹 山崎紀宏 盛岡市
会 山崎紀宏 盛岡市

(宮城)

長 武井晃 松島町
副 植木正二郎 仙台市
副 植木正二郎 仙台市
幹 植木正二郎 仙台市
会 植木正二郎 仙台市

(千葉)

長 杉本征年 市川市
副 杉本征年 市川市
副 杉本征年 市川市
幹 杉本征年 市川市
会 杉本征年 市川市

(東京)

長 東村山彦 北山小長
副 本間昭彦 大倍小長
副 本間昭彦 大倍小長
幹 本間昭彦 大倍小長
会 本間昭彦 大倍小長

(青森津軽)

長 中谷匡利 青森市
副 志村克美 函館市
副 志村克美 函館市
幹 志村克美 函館市
会 志村克美 函館市



夕陽書道展を終えて

第七回夕陽書道展実行委員長 澤田 稔
(昭和45年卒 函館市柏野小学校)

まさに伝統の味、黒地に白文字が映える夕陽書道展のポストター。そして夕陽の顔たる会旗が飾られた中、七回目の展覧会がこの程六月十日から十五日まで函館市芸術ホールギャラリーに於て開催されました。

物故顧問出品者、文化勲章受章の故金子鴨亭先生、母校の名誉教授の故太田鶴堂先生(ともに遺作)をはじめ、元母校教官西村舟水先生、永田青雲先生、現教官須田廉亨先生、そして同窓の大先輩諸氏、書壇でご活躍の方々、書に親しまれている方々等々、全国各地から九十点もの作品が寄せられました。



故金子鴨亭先生遺作『遠』

松前町出身、本学同窓の故金子鴨亭先生(昭四卒)―遺作写真―は、この七回展を待たずして帰らぬ人となりました。あらためて鴨亭先生の偉大さに低頭し、心よりご冥福をお祈り申し上げる次第です。

五回展より企画継続してきている特別出品には、ご多忙の中、書き上げられた安島会長の「夕陽無限好」、金山教育長の「寧」が観る者の心をとらえ、一段と格調の高さを奏でておりました。

「創造し行動する夕陽会」につなげ、「生きる証の書」の交流をめざして出品

の呼びかけをしてまいりました。

卒寿を越えられたといえど益々お元気な西村舟水先生(今回展出品者中最高齢はじめ、太田凌雲氏(昭十一卒)、中北隼氏(昭十四卒)、野澤太極氏(昭二十卒)、松浦翠雲氏(昭二十二卒)等大先輩の方々が変らず意気盛んなところをお見せ戴きました。野澤太極氏には遠い鎌倉より祝賀懇親会に駆けつけられ、乾杯の首頭と共に印象深いお話を戴きました。

若くは大学院生に至る幅広い出品層となり、作品群についても、漢字、仮名、近代詩文、墨象、少字数、篆刻、刻字とバラエティに富み、かつ創造性にあふれていたことなど、今回展の特徴の一つでもあります。

六日間の会期中、お陰様で一千名にも及ぼんとする来場者に恵まれ盛會裡に七回展を終了できましたこと実行委員会一同心より感謝申し上げます。

第八回展は四年後になりますが、そのときを書いた「生きる証」を交流していきたいものです。各位の絶大なご支援、ご協力をお願いいたします。

いたしま



会場風景より

函館校の未来像に夢をもつて 大坂分校主事講話

夕陽会総会の前に、「北海道教育大学改革のその後」―函館校の在り方―と題して、昨年に続き、母校の大坂分校主事の講話が行われた。

○ 昨年もこの席で大学改革についてお話しされていた、たい経緯もあり、現在の状況について、分校主事としての自分の説明責任という形でお話する。

○ 教員養成という、人として生きる上で重要な役割を担う人材を受け入れてきた意義は大きい。そうした中、大学改革という北教大全体が抱えている問題の中で、函館校にどのような意味付けをしていくかが課題である。

○ 新しい時代の北海道教育大学の姿というところで、全学の今の姿勢は、教員養成基幹大学としての役割を堅持するとともに、文化的な領域での時代の要請に応える機能を新課程に考えようという原則に立っている。

○ 全学の意向として、函館校には芸術・スポーツを除く新課程をという提案が出されているが、函館校から教員養成を撤退させるという明確な理由はない。

○ 現在提案されている形の中で、北教大全体として、教員養成の充実・発展のために何が大事か、函館校に期待されているものは何か、を明確にすることが今の課題である。同じ教員養成を担当しても、各キャンパスが特色をもつてメリハリをつけることが大事であり、同じものを並べるだけでは意味がないという観点から議論してほしいと提案している。

○ 当初、教養系の新課程を函館で、という提案に大きな不満と違和感をもち、三年程の議論の中で、今の時代に必要な高等教育の役割は何かを詰めてきた。

○ 教員養成は大事であり、社会的な尊厳をかけて、北海道全体としてやらなければならないが、同時に、同じ重さ、同じ社会的尊厳を新課程にも置かせてほしいというのが函館校としての希望である。そのためには、新しい学部として自立することが大事である。

○ 今のアイディアとしては「環人間文化学部」というネーミングを考えており、その学部のもとに様々なコースを選択できるものを考えたい。北海道教育大学が教員養成で培ってきたノウハウを生かしながら、教員免許を卒業要件に課さないで、教員の道も選択できる教養課程を考えていきたい。

○ 先般の代議員会で、教員養成を充実させること、それが見えれば函館は教養課程を引き受けてもいいという提案をした。大義名分があればその道を進むというのが函館の姿勢である。

○ 将来に向けて、函館校としての夢がある。それは、その地域にあつて、他の国立大学ができないことを新しい学部構想のもとでやっていきたいということである。それが、北海道教育大学の中で、函館校の生きる道である。

○ 今はまだ函館に新教養課程を置くという実際の理由は希薄だが、一たび置くとなれば、北東北・北海道全体を睨んで類例のない大学を創っていききたいと考えている。十年先、二十年先の評価に耐えられる大学づくりをした



※『夢と誇りをもつた大学に』という強い決意が感じられる講話でした。(昭和45年卒 亀田小学校 大平 洋記)

就任ご挨拶



「寮歌」に魅せられて

副会長 長谷川 良 任
(昭和41年卒 函館市立湯川中学校長)

このたび、函館市中学校長会会長との係わりで、職能上とは言え歴史と伝統を誇る夕陽会の副会長に六月十四日の総会で選任されました。正直言ってとまどいと共にその責任の大きさを痛感しております。どうぞよろしくお願い致します。

私にとって初めて「夕陽の心」を強く意識したのは、あの大懇親会の最後に歌う「寮歌」の大合唱でした。誰が作詞作曲したのかわかりませんが、理想の教育をグイグイと求め進んでいく気概と躍動を感じ、自分自身の中の教師としての魂を甦らせ、また火をつけるものでもありました。先輩・後輩が心一つにして、連帯と教育の使命に燃えた寮歌を歌っているあの場面に自分があることに誇りを感じ、また、力量不足も感じたものでした。できれば父と一緒に歌うことができたら……と思う時もありました。

私事で恐縮ですが、父は昭和二年に師範学校を卒業し、檜山・渡島の各学校に奉職。昭和十九年の召集で色丹島に配属され、終戦後シベリア抑留となり、昭和二十二年戦病死したと母から聞いた。全寮制である当時の師範学校で、父も教育の使命感に燃え、大きな声で歌っていた

のではなかったかと想像しております。

今、母校は国の大学再編構想という大きな波のうねりの中にあります。教養系課程の集約という風向きがありますが、教員養成課程として約九十年の歴史をもつ母校に教員養成機能がなくなつた場合、同窓として断腸の思いであることは申すまでもございません。大学は全て人間教育の場ですが、少なくとも「教育大学」は「教育」の「大学」であり、教育の専門職である「教員」の養成機能があるのが最低の条件であることは誰れしも思うことではないだろうか。

先日の第七回夕陽書道展において、安島会長さんの「夕陽無限好」を拝見し、また総会で教員養成課程存続の母校の方向性を、強い信念で切々と語った姿に強く感銘を受けたところです。会長さんの母校を愛し、夕陽を愛する心は教育を愛する心ではないかと推察しております。

我々現職の教職会員も、会長さんを始め大先輩の教育にかけた心意気である寮歌の歌詞を改めて噛み締め、特に「それ育英の大偉業、天授の使命を肩にして」を意識しつつ、日常の教育実践に精励すべきではないかと考えております。



副会長就任にあたって

副会長 高橋 康 男
(昭和42年卒 江差町立南が丘小学校長)

この度、檜山校長会長に選任され、職能上ではありますが副会長の重任を仰せつかりました。その重責に身の引き締まる思いであります。

安島会長のもと、役員の皆様のご指導をいただきながら、任務をまっとうすべく微力ながら全力を尽くしたいと考えておりますので、よろしくお願い致します。

母校函館校は、大学再編問題で将来展望が揺れている時でもあります。教員養成教育機関として有為の人材を輩出してきた母校が、教員養成課程を失うことになるならば、その影響は計り知れないものです。夕陽会の総力を挙げて、母校への支援体制を確立しなければならぬと思います。

最初に赴任した檜山の地で、私は特に夕陽という意識は持つておりませんでした。夕陽出身の先輩は親身になって色々な事を心配してくれたり、教えてくれました。様々な場面で先輩にはお世話になりました。又、元気ががんばっているか、と、声かけをしてもらったことを大変心強く、感謝しております。そのような絆をより一層広めていかなければならないと思っております。

檜山は少子化の影響で学校の統廃合が進んでおりますし、支庁再編問題や町村合併などで、ますます学校数・教員数の減少が予想されます。そのような中で、毎年五月には他管内からの転入者・

新採用者を迎えての「歓迎会」の実施。そして、二月には退職する先生方の「先輩を送る会」を実施しております。参加者全員での『拍手』そして『寮歌』を歌ってお互いに同窓としての連帯感を確かめ合っており、大変有意義な会になっております。

又、各支会(町)でも新年度には総会を兼ねて歓迎会や送別会等も実施しております。

夕陽会員は減少傾向にありますが、これまで培われてきた夕陽の同窓意識は脈々と続いております。先輩から後輩へと各事業が確実に引き継がれ、若い世代の後継者も着実に育っていることを実感しております。

新しい時代に相応しい「創造し、行動する夕陽会」をモットーに、会員相互の連携を重視し、会員の英知を結集して、新しい時代に対応する夕陽会の歩みが求められているのだと思います。

時あたかも、教育改革の真つ只中。社会状況の急激な変化に伴って、教育界を取り巻く状況も複雑で多様化しています。諸先輩の指導を仰ぎながら同窓の一員として教育の或るべき姿の実現に努力したいと考えています。夕陽会の充実・発展に少しでもお役にたてればと思っております。



幹事長就任にあたって

温もりと活力を感じて

幹事長 藤川 隆

(昭和48年卒 函館市南北海道教育センター所長)

この度、夕陽会本部幹事長という大任を仰せつかることになりました。

前任者の松本征八先生は、十年間にわたり幹事長として夕陽会を支え、平成十年の「八十周年記念事業」や平成十三年の札幌での総会・懇親会を大成功に導くなど、会の充実・発展のために多くの業績を残されました。

このように、まさに夕陽の歴史に残る大幹事長であった松本先生の後任として仕事を引き継ぐことになり、その責務の重さを改めて痛感いたしております。

安島会長をはじめ、本部役員の皆様方や会員各位の御指導と御支援をいただきながら、幹事長としての役割を一生懸命に果たしてまいりますので、今後ともよろしくお願い申し上げます。

私事になってしまふ恐縮ですが、私は、昭和四十八年に胆振管内の豊浦町立山梨小学校で教職の道をスタートさせました。全校児童七名の小さな学校でした。

今考えてみますと、生意気で怖いもの知らずの私は、人事異動の希望など身勝手なことばかり言って校長先生を困らせていたように思います。

しかし、その校長先生は夕陽の後輩である私を決して見捨てず、時には諭し、また時には私の言動をじっと見守っていて下さいました。

恥ずかしい話ですが、五十を過ぎたこの年齢になって、ようやく、その校長先

生の温かな配慮のありがたさを実感できるようにになりました。

その後、登別の小学校、函館の小・中学校に勤務し、平成五年からは指導主事として、釧路、後志、渡島の教育局で仕事をさせていただきました。

新米の指導主事時代、同窓のある校長先生の学校を訪問した時に、その校長先生から「この地域では、夕陽の指導主事がどんな助言をするのか、管内教育の充実のために、どんな仕事をしてくれるのか、たくさんさんの期待と同時に厳しい目で、みんなが見ているよ。さすが夕陽の指導主事だと言われるよう一生懸命に勉強して、多くの人から親しまれ、信頼されるようになってほしい」と言われたことがありました。

後輩にだからこそ言っていただけ校長先生の励ましの一ひと言がとて重く残って、そのことを忘れず仕事をしてきたつもりです。

少し大げさな言い方になってしましますが、私にとつて夕陽会とは、いつでも安心して身を置くことのできる「温もりのつながり」であるとともに、自分を奮い立たせてくれる「活力のつながり」でもあると思っております。

この年齢になり、特に、後輩の方々にも夕陽会から温もりと活力を感じ取っていただけるよう、自分のやれることを見つけて行動していきたいと思えます。

三年ぶりに附属小学校に戻り、このたびの総会で副幹事長、兼庶務部長を正式に仰せつかりました。

四月に着任してすぐ、本部役員会、顧問・参与会、そして支部長会議、本部総会等の運営を務めさせていただきました。

初めての仕事で右も左もわからない状況でしたが、安島会長はじめ役員の方々のご指導の下、何とか無事に本年度の総会を終了することができ一安心しているところであります。会員の皆様のご理解とご協力に感謝申し上げます。

今回、総会に向けた庶務部の仕事を通して、今まで積み上げてこられた夕陽会の八十有余年の歴史の重みと責任の重さを改めて実感しました。同時に、多くの会員の方々から在学当時のお話や現在のご活躍の様子などを拝聴する機会が増え、共に母校への熱き思いを募らせ、分かち合っていることへの期待感でいっぱいになりました。

三年前から附属小学校に夕陽会の専用電話（〇一三八―三四―五五二〇）が設置され、全国の会員の方々からの窓口として、慶弔・受賞関係や会員の所在、前納会員の入会への問い合わせなど、様々な用件に直接対応できるようにになりました。夕陽会のご不明な点、お聞きしたいことなどありましたら、どうぞお気軽にお電話下さればと思います。可能な限り会員の皆様のご要望にお応えしたいと考えております。今後ともよろしくお願いたします。

この度、附属函館中学校副校長の立場から、副幹事長（兼組織部長）の大役を仰せつかり、その責任の重さに身の引き締まる思いしております。

振り返ってみますと、昭和五十四年に福島町立吉岡中学校に赴任して以来、それぞれので、同窓会の名を象徴する如く荘厳な夕日に出会って来ました。松前沖日本海に沈む茜の夕日、十勝平野から望む日高山脈を柿色に染めて沈む夕日、秀峰利尻富士のシルエットを映し出す真紅の夕日等、全道各地で観望し、幾多のすばらしい同胞にも巡り会うことができました。

各地で見たすばらしい夕日の残像に、夕陽人の心を重ね合わせ思い起しつづ、これからの会の発展のために精励する決意を新たにしております。

さて、昨年度から「創造し、行動する夕陽会」を指針に掲げ、活動を推進しておりますが、現職の若い先生、女性会員、さらには民間の職にある会員も取り込んだ一層の組織力の強化と各支部段階の活動を活性化する工夫等がますます大切になつてくるものと考えております。

そのような意味から、安島会長はもとより、役員の皆様のご指導を賜り、道内各地で勤務した経験と多くの方々とのつながりを大切にしながら、組織部を中心とした活動の工夫に微力ではありますが、全力を傾けて参る所存であります。

今後とも、会員の皆様のご協力をお願い申し上げます。就任のご挨拶に代えさせていただきます。

副幹事長 土谷 敬

(昭和54年卒 附属中副校長)

副幹事長 類家 直人



庶務部長を仰せつかって！

副幹事長 類家 直人

(昭和51年卒 附属小副校長)



異郷の地で育てていただいた夕陽人の心へのお礼

副幹事長 土谷 敬

(昭和54年卒 附属中副校長)

同期会だより

学びの友とうち集い

「夕陽四〇会」の活動をふり返って

絹野 重治

(昭和40年卒)



一、「夕陽四〇会」誕生の経過

「夕陽四〇会」の誕生は、そんなに古いことではなく、今から十三年前の平成二年のことです。

新制大学になってからは、師範学校時代とは異なって全寮制でもなく、同年度の学生が一同に会する機会は、ほとんどありませんでした。各研究室単位でまわっていた私たちが、大学卒業後、同期会を立ち上げるといふことは、なかなかたいへんなことでした。そんな訳で大学を卒業してから当分の間は、「同期会」を結成するという動きは、全くなかったと言ってもよいと思います。

しかし、同期会誕生の願いと火種は、全寮制であった師範学校時代と同じように、出身地や教科の壁を越え、寝食を共にした「桐花寮」にありました。

私たちが卒業した昭和四〇年は、就職難の年で、全道各地に、チリチリバラバラになって就職に就いた年でした。

そんな中で、日高、胆振、空知方面に就職した「桐花寮」組の仲間が中心になって、旧交を温める会を何度か開いていました。この会が、「夕陽四〇会」誕生の母体となりました。さらに、誕生に向けて大きな役割を果たした人がいます。その人は、故藤川暉氏です。



若い樹、夕陽讃歌を歌う

藤川氏は、教職から行政職に変わり、日高、胆振、上川、宗谷、石狩、本庁など道内の各教育局に勤務し、本道の教育界で大活躍した人です。氏の仕事がら、全道各地に就職していた同期の仲間との交流がたいへん多くなりました。生前、「夕陽四〇会」の仲間のつなぎ役、同期会の生みの親として尽力した氏の功績は誠に大きなものでした。

藤川氏は、「夕陽四〇会」設立の下地が、日高、胆振、空知、後志などを中心に十分出来ており、機熟したりとして、函館へ来るたびに、同期会の立ち上げを仲間にも強く訴え続けました。このような経過を経て、大学卒業以来二四年ぶりに「夕陽四〇会」が誕生した訳です。

二、「夕陽四〇会」誕生後の動き

第一回の会合を平成三年に函館で実施しました。初めての会合だけに、どれくらいの人が集まってくれるか心配しながらの開催でしたが、道内や本州から四四名の参加を得、盛大に実施することが出来ました。多くの人が、学生時代は疎遠であっても、同期の仲間の集いを強く求めていたと言ふことを痛切に感じたひとときでした。

その年は、ちょうどオリンピックの年でしたので、第二回の会合は、みんなが忘れないように次のオリンピックの年に開催することを約束して解散しました。

しかし、四年はとも待ちきれないという声があり、あちこちからあがり、二年後のアジア大会が開催される年へと短縮することにしました。

さらに、二年でさえも待ち遠しいというところで、とうとう毎年開催することになり、現在に至っています。いつも集まりが良く、「夕陽会八十周年記念」の会には、六四名が参加し、会を大いに盛り上げたところでした。

「夕陽四〇会」の特徴は、前述のように、就職難の年で全道各地に就職したことでした。

そのことの利点の一つとして、各地で回り順に幹事を引き受け、同期会を開催することが出来たことです。

何度か同じ所での開催がありますが、



平成14年8月函館での「夕陽40会」

今までに函館、胆振、札幌、後志、日高、檜山、帯広などが開催地となっています。本部の安島会長様や松本前本部幹事長様にも数多くご参加いただきました。

その二つ目として、多くの仲間が「夕陽会」各支部の要職に就き、会の活性化に向けて尽力してきたことです。お陰様で、支部長会議や支部幹事長会議を開くたびに、ミニ「夕陽四〇会」を開催することが出来ました。

平成十四年度で、ほとんどが定年退職を迎えました。平成十六年度の会合時に向けて「夕陽四〇会記念誌」を発行することになっています。「夕陽四〇会」の会員にはすでに案内済みですが、現在、発刊に向けて、原稿や製本代となる資金を集めているところです。

(タイトルは、同期石坂新一氏の作詞による学生歌「若い樹」の一節から)



空知支部報告

空知連合支部 松田 潔
(昭和45年卒 浦臼町立浦臼中学校長)

平成十五年度の夕陽会空知連合支部の総会は、今年は四月二十六日に行われましては忙しい事情の中での総会でした。今年は大卒の新人が入り少々新鮮味を感じさせる総会となりました。思い起こしますと十年くらい前でしょうか、平成六・七年度には管理職は校長一人と言う時代もありました。社会教育主事の私も空知の師団会議に管理職の代表として参加したこともありまして。

会員八十一名中、連合支部の総会に参加する顔ぶれはいつもと同じ様なメンバー二十五名位ですが、空知教育局の指導主事の方は二名とも出席していただいております。校長・教頭の管理職も十名を超え安定した活動ができております。教員採用の人数さえ減少の時代です。当然にして夕陽の新入会員の減少はやむなしと考えております。

今年度は空知の中での夕陽の存在と活動の強化を考え、三役にて教育局、各教育委員会の挨拶周りに力を入れました。

空知は今、教頭不足で悩んでいます、各師団長が集められ教頭候補の人選を頼まれておりますが、夕陽も人材がいらないと言っているのが現状です。誰でも教頭に出せば良いと言ふことにもなりません。空知夕陽は三十代の教員が多いということも

あり時期がくるとよいメンバーがそろうと思えます。

組織部・研修部とありますが、地理的に遠いこともあり部ごとに会合をもつことはできておりません。若手会員を集めるためにボーリング大会などをしたこともありましたが、続きませんでした。

大切なことは会員各自が自覚を持ち、自分の職場で活躍することが一番と考えております。その面では、夕陽会員の評判は大変よろしく、各学校での中心的存在で活躍している会員が多いことには喜ばしく思っております。教頭の人選をお願いに行った各校長さんからは大変助かっていると言われる会員が多いのです。

私はこの二・三年夕陽の本部総会に出る機会に恵まれました。特に札幌での八十周年記念総会につきましては、招待されました他の師団長から夕陽の総会はずばらしいとの言葉をいただきました。

本部の総会に出ると元気がでるような気がいたします。熱い情熱を与えてくれる母校の精神「土地墾闢」、「人民蕃殖」を受け継ぐためにも、若い会員を本部の総会・懇親会に参加させ元気をもらってきたらと思っております。



青森津軽支部だより

青森津軽支部幹事長 湯田 秀樹
(平成元年卒 青森県立八戸第一養護学校)

青森市と函館市は、津軽海峡を隔てながらも、古くから人や物の交流が盛んに続けられてきました。そのような歴史もあり、青森市や弘前市、黒石市、東津軽郡、南津軽郡、西津軽郡を範囲とする青森津軽支部は、道外支部でもっとも多い三百名ほどの会員を有しています。

毎年秋に総会を開いていますが、出席者は十数名ほどで、新規会員の把握など組織の強化・活性化、支部独自の活動の充実など、他の道外支部と同じような課題を抱えています。

平成十二年十一月、それまで岩手県盛岡市で開催されていた「道外支部幹事長会議」が青森市（会場はメモリアルシンプア八甲田丸）で開催されました。



八甲田丸（旧客室）で行われた道外支部幹事長会議

合わせて行われた懇親会には、総合学

など、初めて総会や懇親会に出席した会員もあり、青森市での道外支部幹事長会議の開催が新たな参加者を掘り起こすきっかけとなりました。



弘前市での懇親会：仙台市からの参加もありました

翌年の平成十三年十月には弘前市で、さらに平成十四年九月には八戸市で道外支部幹事長会議が開かれました。参加者からは、「今回の会議をきっかけに開催地となった西北五支部や県南支部それぞれの支部活動を活発にしていきたい。」「県内三支部は、支部の在り方を探ったり、支部の活性化のために、これまで以上に連携しよう。」という声がかれました。平成元年、青森市と函館市は新青函経済文化圏の形成をめざし提携を結びました。青森津軽支部もこの「ツインシティ構想」にならって、より一層本部や各支部との関係を深めたいと考えています。

支部だより

前納会費納入会員名簿追加分

Table listing members and their birth dates. Columns include names (e.g., 西陰敏夫, 中野悠紀子), birth dates (e.g., 昭9, 昭39), and other identifiers.

夕陽會員計報

(平成十五年六月二日まで)

Main membership list table with columns for names, birth dates, and other details. Includes members like 池田健氏, 吉本幸作氏, etc.

(平成十五年六月三〇日現在)

Table listing members and their birth dates, continuing from the previous table.

五代目となる新函館駅舎

平成十五年六月二十一日、約六十年ぶりの全面改築となる新駅舎が開業しました。このデザインは、デンマーク鉄道公社との共同ワークで、「ひかり」「函館山」「二十一世紀」をキーワードに設計されています。



駅舎中央には、高さ二十四メートルのロトンド(吹き抜け空間)を配置し、ガラスとチタンパネルによるシンプルでモダンなデザインの五代目駅舎です。又、コンコースには、彫刻家 流 政之氏による作品のデザイン壁 (長さ二十

編集後記

◆明治三十五年、函館(亀田)と本郷(現渡島大野)間に鉄道が開通し、函館停車場開業以来約百年の歴史の中で、四代目駅舎は昭和十七年に完成、およそ六十年の風雪に耐えてきました。その姿も今年七月末には消えてゆくことになりました。表紙写真は、正面大時計がはずされた四代目駅舎から新駅舎へバトンタッチの記録として掲載しました。

◆今年度の推進事項には「女性会員及び若手会員の運営への積極的な参画」とあります。少子化の波は、会員数の減少にも表われてきています。各支部では、貴重な若手会員の参画を願って様々な工夫をされていることと思います。楽しい活動などありましたら、情宣部までお知らせください。

◆次号依頼…次回、「支部だより」は、渡島支部と青森南部支部の予定です。準備をお願いいたします。「支部の歴史を振り返って」は、岩手支部にお願いいたします。資料集めなどご苦労をおかけいたしますがよろしく願います。

◆今年度も、夕陽会報発行へご協力をいただきました。よう、会員皆様にお願いたします。

(情宣部長 藤川 潔 記 昭45年卒)

本部事務局へのご連絡などは、次の所へお願いいたします。

041-0806 函館市美原3丁目48番6号

北海道教育大学教育学部附属函館小学校内 北海道教育大学夕陽会本部

電話番号 (0138) 46-2235

夕陽会専用 (0138) 34-5520

FAX番号 (0138) 47-7376

題字 文化勲章受章者 金子賢蔵(鶴亭)氏 昭4卒